



健康会だより

<主旨と理念>

長谷部式健康会は『自分の健康は自分の努力で』をスローガンに健康普及活動をしている会です。健康は人生最高の宝です。世界人類の健康と平和に奉仕しましょう。『体質別』は健康を守る自然の法則です。

発行所 長谷部式健康会 総本部
〒491-0905 愛知県一宮市平和1-2-13
発行人 長谷部茂人
発行部数 3000部
tel 0586-46-1258
fax 0586-46-0367

E-mail kenko@world.interq.or.jp
http://www.interq.or.jp/world/kenko/



社会が変わると病気が変わる よるず相談という医療のありかた

作家・精神科医 **なだいなだ**

作家で精神科医のなだいなだ氏を迎えて「病名の持つ意味」というテーマでお話を伺った。氏はアルコール依存症治療の草分け的存在で、初代アルコール依存症治療センター(当時)の責任者。精神科にまつわる不可思議な現象を、その歴史と解説を加えながらご自身の体験談を明かす。社会が病名をつくる…その史実に迫る。

(2006年12月3日記録)

ずいぶんウソの診断書を書かされたものだ…

私は精神科医になって、これまでの自分を振り返ると、ウソの診断書をたくさん書いてきたなあ〜と思う。正確には書いたというより、“書かされた”というのが真実。

私はアルコール依存の患者さん達を集めて治療するというのを、日本で最初にやった人間なんですけれど、これが大変だった。

「先生！娘がアルコール依存だなんて診断書に書かれたら、結婚できなくなるじゃありませんか！別な病名にしてください」。或いは男性ならば、「アルコール依存症のため3ヶ月の入院が必要です」なんて書いてもらっちゃ、復職できなくなるじゃないかッ！」なんて言われる。仕方がないから肝臓障害とか書いたりしていました。分裂病の患者さんだったら、ノイローゼとか神経症など、まあ全くウソではないが、本当でもない病名にしていた。こんなの他の科ではありえない、精神科特有の現象だと思います。

最も古い病名『ヒステリー』

古代ギリシャ、医聖ヒポクラテスの時代からあったことで有名なのは、ヒステリーという病気です。その語源は女性の子宮を意味する『ヒステラー』からきている。当時は女性特有の病気と信じられていて、子宮が体の中を動き回るために起こるに

ホーム <http://biwahonpo.jp/>

違いないと考えられていました。病気は神の罰だとか、悪魔の仕業だとか思われていた時代だったので、ちょっと不自然な解釈でも支障はなかったのかもしれないが、しかし、子宮があちこち動くなるとどう考えても非現実だから、他に原因があるんじゃないか、もしかしたら脳に問題があるのかもしれないと言う人もすでにいたようです。

ルネッサンスの頃には死者を解剖する人が現れるようになる。キリスト教では一度死んでも復活するという考えがあったので、死体をバラバラに切り刻むなんてことはタブーだった。ところが、レオナルド・ダ・ヴィンチは法王の庇護があったから、一応許可されやることができた。そのうち、『画家や彫刻家がよくて、なんで病気を治す医者が解剖しちゃダメなんだ』という理屈だったんでしょう、夜な夜な墓場から死体を掘り出しては解剖して研究する医学者が出てきた。

18世紀から19世紀にかけて、それまでペニビエニ、フェルネルたちによって研究された病変と病気の関係をまとめて、モルガーニというイタリアの医者が『病理学』として集大成しました。

その後、顕微鏡が発明され、同じ臓器でも病気によって違う病変がある、より細かな病気の分類がなされるようになる。言い換えれば、病気が生物の細胞段階で突き止められるようになったのです。

ヒステリー復活

19世紀になるとフロイトという医者が精神分析学という学問をうちたてます。しかし、彼は分からない患者は何でもかんでもヒステリーにしてしまう。

医師が大学で学ぶときは、鑑別診断というのをを行います。どの分野でも最初に除外されるのが、このヒステリーだった。さすがに皮膚科だけは見て歴然だから、『これをヒステリーという』なんてものがないのだけれども、内科でも眼科でもヒステリーによるものという診断が必ずあった。

つまり、分からないものとして残されたものが精神病ということでおさまっていたのです。



『キツネ憑き』

19世紀の代表的な精神病に『憑きもの』の病気があった。憑依性精神病というカテゴリーで呼ばれていた病気で、日本では『キツネ憑き』が有名です。

日本の大部分に分布していましたが、四国ではキツネではなくてタヌキで、『ムジナ憑き』なんて呼んでいた。インドネシアやマレーシアでは『アモック』という名で広がっていたし、フランスやイタリアなどヨーロッパでは、犬神憑きの親戚みたいな『ルーガルー』という犬オオカミ憑きという想像上の動物による憑依があった。

満月の夜にルーガルーに噛みつかれ発症すると四つん這いになり、そして他人に噛みついて、たちまち村中にその病気が広がったという伝承が残っています。また、尼僧院で悪魔がついたとか、いろんな話があるんです。

これら『憑きもの』の話は20世紀にはほとんど消えてしまうのですが、日本の場合、1950年ごろまで『キツネ憑き』が存在しました。私のおばあさんの頃は、まだたくさん『キツネ憑き』があった。

私もたった1例だけにすぎないけれど、その『キツネ憑き』を診察したことがある。おそらく日本で『キツネ憑き』という診断をつけた最後ぐらいの例だと思います。その後に調べてみたけれど、それから先に報告例がない。『キツネ憑き』は全く消えてしまったんです。なぜでしょうか？…それは迷信がなくなったからです。学校教育のおかげで、キツネの超能力という迷信をはらったためになくなった。医師がなくなったのじゃないのです。

ちょっとだけ、その1例の『キツネ憑き』を診察したときの様子を話しましょう。

みなさんはたった1例だけの『キツネ憑き』をどうしてそれが『キツネ憑き』だと分かるんだって不思議に思われることでしょう。そりゃ私が教授のもとで「君、これがキツネ憑きだ」って教わっていたら分かるかもしれませんが。学生のと時から先輩から「これがこの病気だ」って教わって医者になるのが普通だけれども、生まれて初めて診た『キツネ憑き』…。

それが『キツネ憑き』と分かるには何の問題もなかった。なぜか？…。その患者さんに一緒に付いてきた人たちが「キツネが憑いた」って言って連れて来たからです。「先生！先生！この人にキツネが憑きました」って言うのだから、「ああ、そうですか」って言うしかないじゃないですか。

連れて来られたのは連れて来た旦那のおめかけさんだった。相当暴れたのでしょ、その男の手は噛み傷だらけで血が流れている。彼女が美人だったから、「いい気味だ」なんてヤキモチを焼いたことを覚えています。それでも彼女は私には落ち着いて対応してくれた。

それから自分で「ここが大切ですよ！—自分でも「キツネが憑きました」って言ったんです。

ですから診断をつけるのに何の問題もない。社会が『キツネ憑き』という病気をつくっていたのじゃないかと思う。そうしてみんなでこういうふうになったら『キツネ憑き』って呼ぶことにしていたから…。

それでは治療はどうするか？かつては巫女さんが『キツネ憑き』の治療をしていた。権威ある巫女さんがいなくなったので、精神科である私のところに連れてきたのでしょね。

私だって教科書に『キツネ憑き』の治療法が書いてあったわけでもない、どこにも「キツネよ出てゆけ！」というおまじないをせよとは書いていませんよ。

それで、当時流行だった電気ショックを1回やったんです。そうしたら本当にきれいに良くなった。もうそれ1ぺんだけですっかり『憑きもの』が落ちて消えてしまった。

アルコール依存症は誰が決める？

私が日本で最初のアルコール依存症のセンターの責任者になったときの事です。私が責任者だなんてちょっと無責任じゃないかと思った。なんせそれまで4~5人のアルコール依存症の人たちを診てきたけれども、一人も良くなっていない。

「まるで詐欺のようなものじゃないか」と教授に言ったら、「俺だって治せないのだから大丈夫だ。サギともカラスとも言わんから行け行け」なんて言われて無理やり行かされることになった。

それから、どうせ教授が何をやっても治らないのだから何でもやろうということになった。効いても効かなくてもまあいいじゃないかって気持ちで、患者さんたちを連れて、毎月10～20km歩いたりしました。

あるとき福祉事務所から電話があった。「先生！これからアルコール依存の患者を2人連れてそちらに行きますから…」という。またある時は奥さんが、「アルコール依存の人を連れて行きますから…」と。「その人は誰ですか？」と聞くと、「うちの亭主です」という。「あなたは女医ですか？」と聞きなおすと、「いいえ、ただの主婦です」という。

私こそがアルコール依存症の権威で、私が最後に『この方はアルコール依存症である』と決めるのだと思っていたのに、「ただの主婦です」という人から「アルコール依存に間違いありません。私が太鼓判を押します」と、太鼓判まで押してくれる。

実際によくある例でいえば、ひどい酒飲みの亭主を奥さんが連れてくる。私が奥さんの話に味方して「そうだねえ」なんて言えば、「先生は女に弱いなあ。女のいうことを何でも聞きちゃうんだから…」と亭主が怒る。それで今度は、「奥さんからみるとアル中かなあ～でもなあ～このぐらいの人はまだたくさん世の中には入院もしないでいるんじゃないかなあ～」と私がつぶやくと、奥さんから、「ちょっと先生！先生は男の見方なの…。男っていうのは本当にいやらしくて、こういう時でも連帯するんだから…」って言われるんですね。私としても立つ瀬がないですね。それでも本当の患者さんは旦那さんの方だから、これからの治療を考えると旦那さんにそっぽむかれると先々困ったことになる。

奥さんはアルコール依存に間違いはないという。亭主は絶対違うという。この意見の違いをどのように調整するかということを、今まで仕事としてきたのです。



社会的病名と医者がつける病名

病名には2つのタイプの名前がある。1つは医者がつける病名、そしてもう1つは社会がつける病名。社会がつける病名で代表的なのが『風邪』です。

「先生！風邪ひきましたッ」といって患者が来る。本当はよく調べないと別な病気かもしれないけれども、患者さんはすでに『風邪をひいた』ことになっている。

先ほどのキツネ憑きも『こうなったらキツネ憑きと呼ぶことにしよう』だったし、アルコール依存症も医師ではなく社会のイメージで『この病気はこうである』というのが固まっている。

ところが社会的病名は社会が決めている病気なので、社会が変わると病気も変ることがある。最初お話ししたヒステリーがいい例ですね。古代ギリシャ時代に存在したヒステリー。中世、医科学の発展で子宮が動いて起こるなんてことは誰も言わなくなった。それがフロイトの時代になるとまた復活して、細胞的病変で診断がつけられないものは、みなヒステリーだと決めつけられるようになる。

キツネ憑きも同様に、教育のおかげで迷信がなくなったら今ではすっかり消えてしまった。



体が病むと心は悩む—よろず相談という医療のありかた

お医者さんのところに来る患者さんの中に、心の悩みを持った人がたくさんおられます。そのことに気付くのが早いのは、むしろ宗教家のほうですね。

明治も初頭、関西に本部のある某宗教の教祖は、そこに病院をつくる。その病院の名前が『よろず相談所』っていうんです。その教祖はこういいます。

「医者のところにかかる人は体が病んで来るのだけれど、体が病むと心は悩むものだ。だからそのよろずの心の相談を受けなければならない」

例えば乳飲み子をかかえた母親が肺結核になる。医者は治してやるから病院に入れという。乳飲み子を持った母親は、「子どもはどうしたらいい？」って考えるじゃないですか。子どもを放って置いて自分だけ入院するわけにいかない。

あるいは稼ぎ頭の父親だったら、「この病気は入院しないといけない」と言われて、「あとの家族の面倒は誰がみるの？私の財産で入院費が払えるだろうか？」と心配になる。誰だってみんな心配になるでしょ。

患者さんは病気であると診断を受けたとたん、それだけたくさんのお悩みを心の中に抱くわけです。それを相談してあげなかったら、患者さんは安心して治療を受けることができない。だからお医者さんが治療することはいいことだけれども、病院としては、様々なよろずの相談を受けて解決するように努力しないといけないのじゃないかって。

そういったよろず相談という精神は、日本の医療の歴史の中で、私は画期的なものの見方であったと思うんです。まだケースワーカーなんて仕事がない時代です。



そういう時代から私たちの時代まで100年です。世の中が変っても不思議ではないし、病気が変わっても不思議ではない。現在、典型的なヒステリーが見られなくなったのも、おかしなことではないのです。



**録音CD版① “こころ”の処方せん
「病名の持つ意味」なだいなだ(80分)**

**録音CD版② 中部シンポジウム2006
「社会と医療-私に自由が少ないわけ」(80分)**

録音CD版①+②+送付手数料=2,710円

<シンポジスト>

- なだいなだ 前出
- 渡 仲三 名古屋市立大学名誉教授、IMUNET代表、医学博士
- 樋田和彦 医療法人ヒダ耳鼻咽喉科理事長、医学博士
- 恒川 洋 恒川クリニック院長、医学博士
- 堀田由浩 YHSクリニック院長、堀田予防医学・統合医療研究所代表
- 小出宣昭 中日新聞社常務取締役
- 毛受芳高 NPO法人 アスクネット代表理事、認知科学修士

*①・②ともに音楽CD再生機でお聞きください

購入ご希望者は、送付先の住所・氏名をご記入の上、下記の連絡先までFAX・電話・メールでお申込みください。

商品到着後、郵便振替にて代金をお振込み願います。

がんを克服するために

—がん緩和ケアにおける試案と展望—

岐阜県立多治見病院
外科部長
酒向 猛



患者さんが、がんの真実の姿を理解し、そこから自分自身の状態を的確に理解して、有効な治療法を実行できるように、—そして何よりも、あなた自身が、がんを克服しようとする強力な意志を持つことが一番大切であると考えます。



テキスト本

酒向猛著

『がんを克服するために』
(A4版378ページ)



セミナー収録DVDビデオ
(2枚組み:4時間)



**セミナー収録DVDビデオ+テキスト本+送付手数料
=7,800円**

●申込み・問合せ先

〒491-0905 愛知県一宮市平和1-2-13 長谷部式健康会

TEL 0586-46-1258 FAX 0586-46-0367 Eメール kenko@world.interq.or.jp